

3. 機械遺産

3.1 はじめに

日本機械学会（以下、本会）が 2007 年の学会創立 110 周年を記念し、機械工学と機械技術に関連する歴史的遺産「機械遺産」を認定し、後世に継承する新しい制度を開始してから早いもので 10 年を迎えた。過ぎ去った当時を振り返ると、1993 年から 2004 年の間に国内に現存する日本の歴史的遺産群（文化遺産 10 件、自然遺産 2 件）が、世界遺産一覧表に記載された背景があった。そして 2007 年は島根県の「石見銀山遺跡とその文化的景観」が文化遺産としてこの一覧表に載った記念すべき年にあたっていた。

また機械遺産（きかい いさん）と世界遺産（せかい いさん）は平仮名表記で一文字の差しかなく、本会員の他にも多くの市民が機械遺産に対し高い関心を持ち注目してくれること、例年の機械遺産認定時にはマスコミ各社が必ず報道してくれることなどは、この認定が社会に確実に定着した証といえよう。

本稿ではこうした史実を考慮しながら本会における機械遺産 10 年間の経過を記し、あわせて今後に向けた提言もおこないたい。

3.2 機械遺産認定前史

機械遺産の理念は、日本機械学会誌（以下、学会誌）連載「技術の歴史」に拠を持つと考えている。ご記憶の方もおいでと思うが、この連載は 1979 年 6 月（第 82 巻、第 727 号）を初回⁽¹⁾とし、本会諸先輩による機械工学と機械技術両面の歴史について自らの経験や研究成果を基に、工学、技術、産業、開発設計、技術者相互の関わり、法制度、技術文化、社会と生活など多面的な内容が展開されている。なかでも名誉員 島秀雄氏（第 38 期：1960 年度会長）による「わが国蒸気機関車の歴史」⁽²⁾⁽³⁾は、この国に適した蒸気機関車開発と設計製造の技術史において、誠に印象深いものであった。

一連の「技術の歴史」では執筆内容に関わる機械技術遺産にも言及され、機械の開発設計における創意工夫、標準化・規格化、量産化に向けた生産技術などの経緯を知るには、現存する機械を通して学ぶ必要があるという姿勢を見て取れる。連載を企画した理事会諸氏の先見の明に対し、改めて感謝申し上げたい。

なお上記以降の機械技術史・工学史関連分野には、学会誌 1992 年 4 月技術史と技術哲学特集（第 95 巻、第 881 号）⁽⁴⁾、論文集 2008 年 10 月機械技術史・工学史特集（第 74 巻、第 746 号、C 編）⁽⁵⁾、さらに機械工学基礎コース「機械工学史」⁽⁶⁾、機械工学便覧基礎編 α1「機械工学総論」⁽⁷⁾がある。

3.3 機械記念物—工作機械編—と『日本の機械遺産』

1997 年 7 月の本会創立 100 周年記念事業の一環として、機械記念物—工作機械編—（小冊子、12 頁）が発行された。ここに掲載された工作機械 29 件は北海道から鹿児島までの国内 15 施設で保存・利活用され、幕末期から明治期における機械技術史上で意義ある記念物であり、技術文化資料の保存活動小委員会が取纏めをおこなった。候補選定に際し選定対象の輸入、製造期を決めた他は小委員会で議論を重ね記念物を決定したが、最終段階では工作機械の歴史に造詣深い中田孝氏（第 41 期：1963 年度会長）始め専門家 9 名のご意見を伺い、理事会承認を経て刊行された。後年、工作機械編に掲載された中から数件が機械遺産に再認定され、重要文化財指定されたものも存在する。

この意義ある本会の事業を工作機械以外にも調査研究を拡げ、機械技術全分野にわたり達成されることが期待されたが継続活動は進まなかった。それは本会出版事業の一環として、『日本の機械遺産』⁽⁸⁾の編集が提案され、同部門の主要会員がその刊行に協力したからである。同書は 2000 年 12 月に上梓され好評を博したが、「機械遺産」という用語はこの書において初めて使われたと記憶する。

2001 年になり工作機械編の続編として機械記念物—鉄道編—の編集が再提案され、技術と社会部門に編集委員会が設けられた。ここでは工作機械編編集時の理念継承を目的としながら、国内で保存・利活用され機

械技術史面で意義ある鉄道車両を機械記念物としてリストアップし、蒸気機関車（2002年2月：25件）、電気機関車・内燃機関車（2003年3月：25件）、電車（2004年3月：22件）、内燃動車・客車・貨車（2007年3月：21件）の順に、当該年度の機械工学振興事業資金援助により発行した。鉄道編では候補選定にあたり、1) 日本製または日本で実用された外国製鉄道車両、2) 1945年までに製造された鉄道車両、3) 1945年以降に製造された鉄道車両については、特別なもののみを考慮する、4) 現存しないが機械記念物として意義を認められるものは「幻の名機」として掲載する、という選定基準を設けたが、これらは『日本の機械遺産』編集時の選定基準をほぼ踏襲している。

鉄道編で取り上げた記念物は93件にもものぼったが、本会理事会承認を得ていないため機械遺産への再認定措置には至らなかった。しかしこれらの中には重要文化財に指定された記念物5件（1号機関車、123号機関車、233号機関車、ナデ6141号電車、東京地下鉄道1001号電車）が存在する。

3.4 機械遺産認定に向けた過程

2005年4月、本会創立110周年記念事業委員会設置が第83期理事会（田口裕也会長・笠木伸英筆頭副会長）で決定され、この事業に「機械遺産（記念物）認定」が記載されていた。続いて同年7月に本会創立110周年記念事業委員会（長島昭委員長：以下、親委員会）が開催され、そこで機械遺産小委員会（委員長は筆者：以下、小委員会）設置が承認された。

小委員会のミッションとしては「機械記念物110選定」が記載され、親委員会内での審議では、1) 社会的アピールを考慮し110件を徐々に認定する、2) 認定数は110件に固定しなくてもよい、3) 本会各支部や特別員にも候補推薦を依頼する、4) データベース化や認定基準策定を考慮する、などの意見がだされた。110件は創立110周年との関わりで、認定数の目標値として提案されたものであろう。少し長くなるが小委員会の開催期日と実施内容を、後世のために簡単に纏めておく。

〈第1回小委員会〉

2005年11月開催、委員に池森寛・石田正治・緒方正則・小野寺英輝・村田良美・高橋征生諸氏が委嘱された。決定事項は、1) 小委員会基本方針の策定（1. 世界に誇る日本の機械遺産を明確化し世界に向けて発信する、2. 機械遺産を通して機械工学と機械工業との関わりを位置づける、3. 技術史的視点に基づく選定・評価基準を制定する、4. 広く社会に向けた機械遺産情報を発信する、5. 機械遺産の認定と将来に向けた保存・継承活動を継続する、6. 選定方針は30件程度の候補、幕末期から昭和30年頃までの期間、支部・部門・会員への推薦依頼、専門家と造詣深い者に意見を依頼、7. 認定証発行など）、2) 本会による「歴史的遺産」指定基準に従った選定作業の実施、候補調査評価用紙検討、3) 今後の選定作業内容確認、である。

なかでも3)において、a) 選定するカテゴリー：昭和30年代の本会部門委員会区分と機械工学便覧などの項目を参考、b) 選定年代の区切り：第二次世界大戦後（昭和30年頃まで）を目安、c) 選定数：カテゴリーの網羅を前提に「30」を目途、d) 今後の選定作業：各カテゴリー3件程度の事例抽出、選考基準摺り合わせ。

〈第2回小委員会〉

2005年12月開催、1) 親委員会の提案を考慮し選定数30件を目標、それにプライオリティーを付与、選定スケジュール案検討、2) 選定候補確認のため監修委員会設置・委員委嘱は2006年8月末頃、同年12月頃監修依頼、3) 本会「歴史的遺産」指定基準内容を再度検討、「機械遺産」(Mechanical Engineering Heritage)とする、4) 指定基準は、Site・Landmark・Collection・Documents、定義検討、5) 候補評価選定用紙の分類項目案コード番号確定。

〈第3回小委員会〉

2006年3月開催、1) 本会「歴史的遺産」指定基準内容を理事会で説明、2) 四つの指定基準に対応する日本語、年代の下限とカテゴリー再検討、本基準を憲法的位置付けとし運用細則作成、3) 支部・部門・会員向け候補推薦依頼状案検討、候補推薦期限2006年7月31日、支部長・部門長へ依頼文書発送、会員向け候補推薦依頼は本会誌2006年5月号会告掲載、学会HPに候補推薦依頼状掲載、4) 選定スケジュール（候補募集、第1次候補選定・現認作業、第2次候補選定・プライオリティー付与、監修委員会へ承認検討依頼、承認結果再調整、認定・表彰準備、認定機械遺産公表：8/7 機械の日、記念式典：認定書交付・表彰状授与）、5) 委員による各カテゴリー別候補検討。

〈第4回小委員会〉

2006年6月開催, 1) 理事会が「機械遺産」認定基準承認, 2) 支部・部門協議会で各長あて候補推薦依頼, 2) 委員の各カテゴリー別候補再検討, 3) 機械遺産, 準機械遺産などランク付け検討, 4) 選定スケジュール一部変更(「機械の日」記念式典時に機械遺産パネル展示追加), 5) 認定後の機械遺産廃棄時の認定証・認定プレート等の対応.

〈第5回小委員会〉

2006年8月開催, 1) 会員等推薦機械遺産候補集計結果78件(1. 工作機械12件, 2. 動力・エネルギー機械:17件, 3. 交通機械:22件, 4. 産業機械1:10件, 5. 産業機械2:8件, 6. 測定器・実験機器:2件, 7. 機械構造物:4件, 8. 機巧・機械要素:1件, 9. その他の資料:2件), 追加候補を小委員会でも検討, 2) 機械記念物-工作機械編-掲載事例の機械遺産候補化検討, 3) 世界に誇る日本の機械遺産を認定, 4) 認定後の機械遺産現状変更・廃棄などへの対応・覚書作成, 5) 推薦機械遺産候補の内部審査とプライオリティ付与, 6) 推薦機械遺産のデータベース化, 未認定候補推薦者への対応, 推薦候補廃棄時の連絡依頼.

〈第6回小委員会〉

2006年9月開催, 1) 会員等推薦機械遺産候補内部審査実施, 再調査候補内容再検討, 2) 監修委員候補者推薦.

〈第7回小委員会〉

2006年11月開催, 1) 機械遺産第1次候補選出, 要再調査第1次候補・要再調査候補リストアップ, 候補等の現認作業実施, 2) 監修委員会候補選出(田口裕也・長島 昭・三輪修三・鈴木一義・河田耕一・富坂 賢諸氏).

〈第8回小委員会〉

2007年1月開催, 1) 監修委員会あて提出の機械遺産候補推薦書作成, 監修結果返送依頼, 2) 監修委員会開催:2007年2月15日, 3) 機械の日記念式典スケジュール・パネル展示.

〈第9回小委員会〉

2007年4月開催, 1) 監修委員会監修結果報告:小委員会推薦候補25件承認(機械遺産名を再検討), 1. 小菅修船場跡の曳揚げ装置, 2. 熊本大学の旧機械実験工場と文化財工作機械群, 3. 足踏旋盤《明治8(1875)年伊藤嘉平治作》, 4. 陸用蒸気タービン, 5. 10A型ロータリエンジン, 6. ホンダCVCCエンジン, 7. 民間航空機用FJR710ジェットエンジン, 8. ヤンマー小形横形水冷ディーゼルエンジンHB形, 9. みのくち式渦巻きポンプ, 10. 高周波発電機, 11. 東海道新幹線0系電動客車, 12. 230形233号タンク式蒸気機関車, 13. 旅客機YS11, 14. カブ号F型(ホンダ自転車用補助エンジン), 15. 麦わら帽子製造用環縫ミシン, 16. 無停止杼換式豊田自動織機(G型)第1号機, 17. 活版印刷機, 18. コマツブルドーザーG40(小松1型均土機), 19. オリンパスガストロカメラGT-1, 20. バックトン万能試験機, 21. 万能製図機械MUTOH『ドラフターMH-I』, 22. 万年自鳴鐘, 23. 「旧筑後川橋梁」(筑後川昇開橋), 24. 機械学会黎明期の学術図書(機械学会誌創刊号, 機械工學術語集及び機械工学便覧), 25. 東京帝国大学水力学及び水力機講義ノート(真野文二/井口在屋教授), これらの英文名(所有者に確認)も併記する, 2) 機械遺産所有者あて認定証受領・記念式典出席確認, 3) パネル展示・感謝状・認定プレート準備, 機械遺産小冊子編集, 4) 機械の日記念式典向け準備.

〈第10回小委員会〉

2007年6月開催, 1) 機械の日機械遺産記念講演会講演者案(小菅修船場跡の曳揚げ装置, 万年自鳴鐘など)検討, 2) 創立110周年記念式典講演会講演者案(熊本大学の旧機械実験工場と文化財工作機械群, 無停止杼換式豊田自動織機(G型)第1号機など)検討, 3) 機械遺産認定番号決定「機械遺産第〇号」(〇は算用数字, 優先順位 Site・Landmark・Collection・Documents→分類コード番号→五十音順), 認定番号は110周年認定を第1号とする(機械記念物には遡及しない), 4) 機械遺産小冊子編集案(表紙:100周年と同じ年輪のデザイン・挨拶・目次・機械遺産マップ・機械遺産紹介・認定基準など・裏表紙), パネル説明文及び校閲, 5) 機械の日記念式典向け最終準備.

本会創立110周年事業の一環で実施された機械遺産認定への応募総数は165件, 審査推薦数及び最終認定数25件. 小委員会開催は終了, 機械遺産認定事業は理事会承認後, 技術と社会部門の機械遺産委員会に継承した.

3.5 機械遺産認定の社会的反響

2007年8月7日の「機械の日」開催前に本会は記念事業をプレスリリースした。これに対し、マスコミ各社は高い関心を持って報道し、2007年8月3日付け朝日新聞（夕刊）では記念事業と「機械遺産」認定を1面で取り上げた。地方紙でも現地の機械遺産を報道し、自治体でもその社会的価値を改めて認識し、後世に大切に継承・整備するなどの対応を進めた。これ以降、「機械遺産」は社会的にも注目を集め今日に至っている。

編集した機械遺産小冊子（図1）も本会員始めこの遺産に関心ある一般市民からも配付要望が続き、事務局が対応に追われたことから、機械遺産認定事業に関する社会的反響の大きさを改めて実感した。また本会でも機械遺産認定を機に、機械技術史面での調査研究成果を学会誌に連載し（2006年4月から2007年4月新・機械技術史：第109巻、第1049号から第110巻、1061号）⁽⁹⁾、これを「新・機械技術史」⁽¹⁰⁾として編集し、2015年4月に発行した。

「機械遺産」認定の社会的反響の一つとして、230形233号タンク式蒸気機関車（機械遺産第12号）の事例をあげておく。この機関車は1902年から1909年にかけて、英国製機関車を模範に大阪汽車製造合資会社で41両（鉄道作業局38両、他私鉄3両）量産された国産タンク式蒸気機関車である。233号は鉄道作業局発注機で、鉄道院・鉄道省・旧日本国有鉄道に継承、廃車後鷹取工場で1962年復元後は大阪の交通科学館（後の交通科学博物館）で保存、1986年10月準鉄道記念物を経て2004年10月鉄道記念物に指定された。2007年8月「機械遺産」認定を経て、2016年3月文化審議会が重要文化財指定を答申、同年8月正式登録（官報掲載）された。同年4月京都鉄道博物館開館により現在は同館に保存・展示、同機前には重要文化財指定と機械遺産認定のプレートが立ち並んでいる（図2）。

3.6 機械遺産認定の今後の課題

2016年度で83件（表1）に至った機械遺産認定の今後について、幾つかの課題をあげておきたい。

- 1) 機械遺産候補について存続の可能性が危惧される。候補に該当すると考え、後世への継承措置が施されたもの以外は解体される危険性が高く、年を追って候補数が減少する。
- 2) 機械遺産推薦は本会員によるが、当該候補の機械技術史的意義を知り、理解している技術者の数が減少していく。
- 3) 機械遺産候補選定カテゴリは、昭和30年代の本会部門委員会区分と機械工学便覧などの項目を参考とし、さらに選定年代の区切りは、第二次世界大戦後（昭和30年頃まで）を目安としてきた。機械遺産認定が10年を迎えた現時点においてこれらを再度見直し、候補母体の範囲拡大をはかる必要を感じる。
- 4) 機械遺産選定に通じた機械技術史面の研究者が少なく、将来的な後継者育成が必要である。
- 5) 機械遺産委員会や監修委員会に文化財行政担当者、文化財調査研究者などを加え、広く社会に開けた機械遺産認定を進める時期にきている。
- 6) 静態保存主体の資料に留まらず動態保存主体の機械遺産も対象とし、あわせて動態保存に要する維持管理、運転・保守・補修技能についても遺産認定の対象となるよう考慮頂きたい。

今後迎える本会創立130周年、140周年では、機械遺産の時系列の一覧表（たとえば、「機械遺産でたどる日本の機械技術史・工学史年表」のようなもの）に、Site・Landmark・Collection・Documents 全てにわたる本会認定遺産が出揃い、これから「日本の機械技術史・工学史」を通観でき、広く社会や教育面に還元できる成果として結実することを、心より願うものである。

[堤 一郎 茨城大学]

参考文献

- (1) 佐貫亦男，ライト兄弟から航空3/4世紀，日本機械学会誌，Vol. 82，No. 727(1979)，pp. 598-603.
- (2) 島 秀雄，わが国蒸気機関車の歴史—その 1，“日本形”ができるまで—，日本機械学会誌，Vol. 83，No. 745 (1980)，pp. 1488-1492.
- (3) 島秀雄，わが国蒸気機関車の歴史—その 2，“日本形”の特徴とその発展—，日本機械学会誌，Vol. 84，No. 747 (1981)，pp. 160-165.
- (4) 日本機械学会誌，Vol. 95，No. 881 (1992).
- (5) 日本機械学会論文集，Vol. 74，No. 746 (2008).

- (6) 三輪修三, 機械工学史 (機械工学基礎コース) (2000).
- (7) 日本機械学会編, 機械工学便覧基礎編 α 1 「機械工学総論」 (2005), pp. 23-49.
- (8) 前田清志編著, 日本の機械遺産 (2000), p. iv.
- (9) 新・機械技術史, 日本機械学会誌, Vol. 109, No. 1049 (2006)~Vol. 110, No. 1061 (2007).
- (10) 日本機械学会, 新・機械技術史 (2010).

*機械遺産の詳細は, 本会 URL 「<http://www.jsme.or.jp>」に掲載されている.



Fig.1 Pamphlet of “Mechanical Engineering Heritage” (Cover)



Fig.2 Class 230 No.233 Steam Tank Engine (Kyoto Railway Museum)

Table1 Total List of “Mechanical Engineering Heritage” from 2007 to 2016

「機械遺産」(2007~2016)所在地一覧 1-83

No. 分類	遺産名(*:非公開)	所在地	No. 分類	遺産名(*:非公開)	所在地
1 S	小菅修船場跡の曳揚げ装置	長崎県長崎市	41 C	内燃機関式フォークリフト	滋賀県近江八幡市
2 L	熊本大学の旧機械実験工場と文化財工作機械群	熊本県熊本市	42 C	高砂荏原式ターボ冷凍機	神奈川県厚木市
3 C	足踏旋盤 《明治8(1875)年伊藤嘉平治作》	愛知県犬山市	43 C	自動改札機	京都府京都市
4 C	陸用蒸気タービン	長崎県長崎市	44 L	青函連絡船及び可動橋	青森県青森市 北海道函館市
5 C	10A型ロータリエンジン	広島県府中町	45 C	幹線用電気機関車ED15形*	茨城県ひたちなか市
6 C	ホンダCVCCエンジン	栃木県茂木町	46 C	岡谷蚕糸博物館の繰糸機群	長野県岡谷市
7 C	民間航空機用FJR710 ジェットエンジン	東京都調布市	47 C	豊田式汽力織機	愛知県名古屋
8 C	ヤンマー小形横形水冷ディーゼルエンジンH形*	滋賀県長浜市	48 C	油圧ショベルUH03	茨城県土浦市
9 C	あのかち式渦巻きポンプ	愛知県犬山市	49 C	ファスナーチェーンマシン (YKK-CM6)	富山県黒部市
10 C	高周波発電機	愛知県刈谷市	50 C	多能式自動券売機	長野県佐久市
11 C	東海道新幹線0系電動客車	京都府京都市	51 L	ステンレス鋼製車両群(東急5200系と7000系)*	神奈川県横浜市
12 C	230形233号タンク式蒸気機関車	京都府京都市	52 L	吉野山ロープウェイ	奈良県吉野町
13 C	旅客機YS11*	東京都大田区	53 C	池貝工場製第1号旋盤(現存最古の動力旋盤)	東京都台東区
14 C	カブ号F型 (ホンダ自転車用補助エンジン)	栃木県茂木町	54 C	卓上複写機リコピー 101	静岡県沼津市
15 C	麦わら帽子製造用環縫ミシン	愛知県名古屋	55 C	ウォッシュレットG(温水洗浄便座)	福岡県北九州市
16 C	無停止付換式豊田自動織機(G型)第1号機	愛知県名古屋	56 L	機械式立体駐車装置 ロートパーク	東京都新宿区
17 C	活版印刷機	東京都中央区	57 C	国産化黎明期の家庭用電化機器	神奈川県川崎市
18 C	コマツブルドーザー G40 (小松1型均土機)	静岡県伊豆市	58 C	旧横須賀製鉄所 スチームハンマー	神奈川県横須賀市
19 C	オリンパスガストロカメラGT-I	東京都八王子市	59 C	大隈式非真円平軸受とGPB形円筒研削盤	愛知県大口町
20 C	バックトン万能試験機*	兵庫県高砂市	60 C	国産初の16ミリ映写機(エルモA型)	愛知県名古屋
21 C	万能製図機械MUTOH 「ドラフター MH-I」	東京都世田谷区	61 C	からくり人形 弓曳き童子	福岡県久留米市
22 C	万年自鳴鐘	東京都台東区	62 L	「土の館」	北海道上富良野町
23 C	「旧筑後川橋梁」(筑後川昇開橋)	福岡県大川市 佐賀県佐賀市	63 L	農機具「資料館」	埼玉県さいたま市
24 D	機械学会黎明期の学術図書(機械学会誌創刊号, 機械工学術語集及び機械工学便覧)	東京都新宿区	64 L	「清水港テルファー」	静岡県静岡市
25 D	東京帝国大学水力学及び水力機講義ノート(真野文二・井口在屋教授)	東京都新宿区	65 C	南極点到達電車(KD604, KD605)	東京都立川市
26 S	三層沢発電所関係機器・資料群	宮城県仙台市	66 C	時代を画した国産腕時計	東京都墨田区
27 S	三池港水圧式閘門と蒸気式浮クレーン	福岡県大牟田市	67 C	国産機械「門形平削り盤」	愛知県犬山市
28 C	円太郎バス(フォードTT型)	埼玉県さいたま市	68 C	フジ自動マッサージ機	大阪府太子町
29 C	機械式通信機器群 (谷村株式会社新興製作所製)	岩手県花巻市	69 D	国産機械製造の礎「国産機械図集」	東京都新宿区
30 C	自動算盤(機械式卓上計算機)パテント・ヤズ・アリスモメツール	福岡県北九州市	70 L	鉄道跳開橋「末広橋梁」	三重県四日市市
31 C	電機事業創業期の国産誘導電動機および設計図面	茨城県日立市	71 C	自動包箱機「105型」	栃木県宇都宮市
32 S	札幌市時計台の時計装置	北海道札幌市	72 C	「ミカサ」のオートマチック・トランスミッション	東京都千代田区
33 L	旧峯岸水車場	東京都三鷹市	73 C	国産初の硬貨計数機	兵庫県姫路市
34 C	親歯車ホブ盤HRS-500のマスターウォームホイール	静岡県沼津市	74 C	小林式定置木炭ガス機関	広島県福山市
35 C	ロコモビル (国内最古の自家乗用自動車)	北海道北斗市	75 C	小型貫流式バイラー「ZP型」	愛媛県松山市
36 C	アロー号(現存最古の国産乗用自動車)	福岡県福岡市	76 C	全電気式産業用ロボット「モートマン-L10」	福岡県北九州市
37 C	英国製50フィート転車台	静岡県川根本町	77 L	松川地熱発電所	岩手県八幡平市
38 L	としまえん「カルーセル エルドラド」	東京都練馬区	78 C	Sバル360-K111型	群馬県太田市
39 L	旧金毘羅大芝居(金丸座)の廻り舞台と旋回機構	香川県琴平町	79 C	二段膨張式船舶用蒸気エンジン	埼玉県東松山市
40 C	たま電気自動車(E4S-47 I)	神奈川県横浜市	80 C	金銭記録出納器「ゼニアイキ」	東京都中央区
			81 C	特許タツノ式ガソリン計量機 型式25号	神奈川県横浜市
			82 C	移動式ブラシ付門型自動洗車機	愛知県名古屋
			83 C	榎野琦灯台の光学系機械装置	和歌山県串本町

分類 S(Site): 歴史的景観を構成する機械遺産、L(Landmark): 機械を含む象徴的な建造物・構造物、C(Collection): 保存・収集された機械、D(Documents): 歴史的意義のある機械関連文書類